
保伝説

砂漠の砂

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保伝説

【Nコード】

N2177I

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

二十五歳、ニートの青年。その自堕落な毎日、母親がついにキレて、無理矢理アルバイトをさせられることに。

ニートからの脱却？（前書き）

これは、最近までニート生活をしていた私の自伝でもあります。皆様、お楽しみください。

二トからの脱却？

「あんた今年で二十五でしょ！ いい加減、パソコンだゲームだや
つてないで、少しでも働いてみる気はないの？」

世間ではお昼と呼ばれる時間帯、俺はゴソゴソと布団の家から抜
け出すと、いわゆる美少女ゲームというのを一時間ばかりやってい
た。これがまた面白いわ、抜けるわで、サイコーなんですよ。

だから、今日はパートが休みで家にいる母が、突然部屋に入って
きて何かをわめき散らしても、相手にする気はなかった。

『あわわ、ひどいよ俊也くん、私を馬鹿にしないでよ』

ひひひ、かわいいなあ。俺のカノン砲、砲身がギンギンに上っち
まってるぜ。

「あいたたたた！！ ひー、何をする！？」

突然母が、俺の耳をぐいつと引つ張った。

「いい加減にしないさい！ てゆうか、人の話をシカトするなんて、
何様のつもり！」

母が俺の耳元で怒鳴るから、鼓膜が破れそうになった。

「なにするんだよ。今いい所なんだよ……、あつ」

母は、俺のデスクトップパソコンのプラグをコンセントから引き
抜いた。

バチッ、と音がして、モニタがブラックアウト。

「おいふざけるなよ……」

「ふざけてるのはそっち！ 私の話を聞きなさい！」

「電源根元から引き抜きやがって、俺の愛機が壊れてもしてみろ、
絶対裁判所に訴えてやるからな！」

だが彼女は、ふっと壮絶な笑みを浮かべた。俺はそれに圧倒され
て、押し黙らざるを得なかった。

「いつからそのパソコンはあんたのものになったわけ？ それはあ

「あなたのお父さんと私が働いてつくったお金で買ったものでしょ？」

「……、いやでも実際使ってるのは俺だからして……」

「もう、そんなことはどうでもいいの、今は。それより問題は、あなたの今の現状よ。二十五にもなって、働きもしないなんて事が、世間でどういうことか分かる？」

「さ、さあ」

「最低の人間っていうのよ。ゴミよ、屑だわ」

「自分の子供に向かって、ゴミだとか屑だとか……」

「別に私は、あなたのことゴミだとか思っただけだよ。でも、世間の人々がどう思うか……」

別に世間でどう思われようと、俺は俺だ。働いたら負けだ。そもそも俺がこんな有様になったのは、世間体だけを気にして、俺の気持ち、俺のやりたいことを何もさせてくれなかったあんたとあの男のせいじゃないか！？

だが、俺は言い返せない。彼女の目が、涙で濡れていたからだ。

「あんたを大学まで生かしたのに、私達の希望はあんただったのに、あんた卒業後働きもせず……。あんた、クラスメイトはみんな社会人として働いていたり、大学院いつて研究したり、それを、あんたは」

「お、俺だって別に、何も努力してないわけじゃないさ。こうやってノベルゲームをやっているのもだな、将来小説家になろうと、文章の技術を磨くためであって……」

それは、半分は嘘だけど、半分はホントだ。

「馬鹿じゃない。とにかく……」

彼女は手に持っていた広告の束を、俺に突きつけた。

「これ、何か分かる？ アルバイトの求人広告よ。いきなり就活しろって言ったって無理だろうから、せめて何かアルバイトでもしてみなさいな。いいわね、今日中に何か仕事を決めて、面接までこぎつけなさいよ！ そうしないと、タダじゃおかないから」

そうどこかのガキ大将みたいなセリフを残して、彼女は俺の部屋

から出て行った。

俺はため息をついて、パソコンのモニタを見た。暗く何も映さぬ液晶。

他の二トと呼ばれる人が働かないのはどういう理由か分からない。ただ、俺が働けないのには理由がある。

俺の両親も全く知らないことだが、俺の脳には器質的な問題がある。

どうも俺は、物心ついたときから人と違った。

勉強ができない子供、だったり運動ができない子供、というのは結構いて、俺もその二つどちらにも当てはまった。しかし、これが最も重大な問題なのだけれど、俺には社会性がないのだった。友達が作れない子供、というのはなかなかいないと思う。少なくとも俺は出会ったことがない、自分以外に。

俺は二十五になる今まで友達がいた試しはないし、これからでもきないであろう。

まあ、自分で自分の評価をすれば、変なところで神経質で、非常に不器用で、つまり社会の中で生きていけないような種類の人間なのだ。

俺が学校で学んだことと言えば、多分それだけだ。自分がどうしようもない人間だという事実、それだけだ。

だから、俺は、もうそんな自分がいやになり、病院へ行って自分の脳を調べてもらうことにした。理屈で考えて、自分の脳に何か問題があることは確かなように思われた。

その時、様々な検査を受けた。病院の側は、俺から金を巻き上げようとしていたのか、様々な検査を受けさせた。

その結果、予想どおり、俺の脳には発達の障害があることが分かった。

「確かに君の脳には異常があるよ。でもねえ、これは僕が見たことのない異常でね、多分病名はつけられない。だから、治療方法もな

い。……でもまあ、問題なく日常生活を送れているなら、それでいいんじゃない？」

医者はその、何となく馬鹿にしたような口調で言った。
予想はしていたことだが、でも、悲しかった。

俺には普通の生き方はできないんだ、その時、そう思った。

「ひひひ、ははは、ふははは」

俺は、部屋の中で静かに笑った。

俺は、パソコンラックの上に置かれた求人広告の束を見た。

まだ両親は、俺に期待をしているらしい。成功しろとは言わないが、人並み程度の生活はしてほしい、と。

俺は仕方なしに、求人広告を眺める。世の中には色々な仕事があるものだ。

ガソリンスタンド、スーパーの商品の品だし、引越しの手伝い……、どれも激しくて、俺には無理だろう。

コンビニでも従業員を募集している。コンビニか、それなら俺にもできそうな気がする。やってみるか。無理なら止めりゃあいいんだ。

知り合いに会うかも知れないので、家の近くのコンビニは止めて隣町にある「ジュリー・エス」がアルバイト店員を募集しているからそこに見ようか。深夜じゃなければ、働く時間は三時間ぐらいだし、後はずっとギャルゲーやってエロ動画見て過ごせるし。

じゃあ、ちょっとオニにして気分を落ち着かせてから、電話してみるか！

はあ、はあ、……終わった、果てた。じゃあそのまま、早速ジュリー・エスに携帯で電話だ。チクチクチク……。

トゥルルル、トゥルルル、……

「はい、こちらジュリー・エス花田下郷店です」

でた、おばさんの声だ。くそ、ババアか、俺より年下の女の子と
か出ればいいのに。

「あああ、あの、求人広告を見まして……、そ、そちらでアルバイトを募集している、と伺った、いや、えーそういう記事を読んだものですから……」

「あら、そう。じゃあ、ちょっとお待ちくださいね」

そう言って、電話に保留音が流れる。確かシュールベルトの「エリ
ーゼへのために」だ。いや、バツハだったっけ？

「ああ、もしもし」

今度はおっさんの声。

「すすす、すいません。今度、そちらで働かせていただきたいと思
っているのですが」

「あー、そう。私はこの店の店長をやっているものですが。天田と
います。あんた、名前は」

「ま、牧野保と申します」

「年齢は？　いくつ？」

「ににに、二十五歳です」

「あー、そうですか。じゃあ、面接しますから、ウチまで来てもら
えます？　俺はいつでも面接できるけれど、今日なんかどう」

えー、いきなり今日面接かい。頭は寝癖ボウボウだし、ひげは
剃ってないし、なんの準備もしてないんだけど。

「君、聞いている？　来るならなるべく早くしてもらえないと、早い
者勝ちだよ。今、後一人は言ってくれると、ちょうど仕事が回って
いく感じなんだな」

「わ、わかりました。じゃあ、今日うかがいます」

「うん、よろしく。時間は、俺がいるのが、あと一時間ぐらいだな。
その後一端店を出て、また戻ってくるのが夜中だから、今すぐ来て」

「今すぐ、ですか？」

「うん。君家どこだい？」

「花田市の本郷台です」

「じゃあ、自転車なら二十分ぐらいで来られるだろうから、3時に来てね」

「3時ですね。分かりました」

「じゃあそう言うことで」

「じゃあ、失礼しま……」

ガチャン、プープープー。

意外に普通に、面接してもらえるんだな。どうも、俺が話している途中で電話切られてしまったのが気になるが、まあ、そんなものだろう。

ニートからの脱却？（後書き）

皆様、どうだったでしょうか。この後、アルバイト先で何が起こるのか。皆様、お楽しみください。

コンビニで

ずっと引きこもってたから、自転車乗るの久しぶりだぜ！ ヒー、おっかねえ。

ああどうしよう、これから面接か、こんな事ならエロゲーなんてやらずに、身だしなみ整えてれば良かった。

ああ、それにしても、面接緊張するな、何を言えればいいんだろう、なんにも思いつかない、まあ、ぶっつけ本番だ。

とか考えているうちにジューリー・エス花田下郷店についた。駐輪場に自転車を止める。

あわわ、緊張のあまりえずきが……。

店の前でしばらくためらって、やっぱり働くの止めようかとか考える。つい一時間ぐらい前まで、俺、働いたら負けだっと思っていなかったつけ。何で働こうと思ったんだ？それは、要するに母に怒られたからで、俺自身が望んだわけじゃない。

でもまあ、現代社会において、そういう青少年は結構多いんじゃないだろうか？

まあ、俺はもう青少年というよりおっさんだけど。

なんてそんなことを考えている場合じゃない。飛び込んでいかなば。行き先の分からない電車で飛び乗ることでしか、偉大なことはできないって、確かルイ・アルチュセールも言ってた。哲学者の、アルチュセールだ。

何で俺はそんなこと知ってるんだ？ つまり俺は単なるニートじゃないって事だ。

俺は、ジューリー・エスの自動ドアをくぐりまっすぐにレジの店員の所へ向かう。

「いらっしやいませ、こんにちは！」

明らかに高校生と分かるレジ店員が、元気よく挨拶する。

俺はガタガタと震え出す、がそれを必死で抑えて、声をかける。

「あの、アルバイトの面接に来たのですけれど」

そうすると、その店員は何故か含み笑いをして、

「ああ、そうですか。聞いてますよ。裏の事務所で店長が待っています。あの扉の奥ですので、開けて入ってください」

と言った。

俺はゆっくりと扉を開けると、事務所の中に入った。

俺から見て左手に、飲み物の在庫が、そして右側にはスナック菓子などの在庫が置いてあった。

さらに、ブラウン管のモニターがあり、店の様々な場所にある監視カメラの画像が逐一表示されていた。そのモニタの下に、おそらく在庫を管理するためのパソコンの液晶がある。

その液晶モニタの前に、一人の小太りの男が座っていた。

「何だあんた？」

彼はそう言った。

「あああ、あの面接にきたものの、もの、も、も、も」

「あゝん、面接！？ ああ、あんたが大野ツモ雄君か？」

「いえ、牧野保ですが……？」

「牧野君？ そうだっけ」

どこをどう間違えれば「オオノツモオ」になるんだ？

「まあいいや。おれっちは来るものは拒まない主義だから、君採用ね」

「は？」

ふつつ、いくらアルバイトでも、そいつがどんな人間なのか確かめもせずに採用するだろうか？

てゆうか、俺履歴書書いてないことに今気がついたんだけど、いいのか？ 電話で話したときも、この人履歴書もってこいとも言わなかったけれど？？

「さて、採用したからには、奴隷のようにこき使ってやるから、覚

悟しておくように」

「は？」

「あんたさー、牧野君だっけ？ どうせ顔全体に無精ひげが生えるような年になるまで働いたことないんでしょ？ 二十五の今まで？」

「え」

それは図星だけど、ふつーそんなこと言うだろうか。い、言うだろうか???

「図星って顔だな。そんな、二十五になるまで働いたこと一度もないようなやつ、フツー、アルバイトとはいえ雇ってくれるところないぜ？」

「いや……、それは言いすぎなんじゃ？」

「うるせえ！！ とにかく、今日からお前のご主人様は俺だ！ 家族よりも自分よりも誰よりも、俺を中心に地球が回ってるように考えろ！ 分かったか、分かったら以下の文を復唱せい！ 『私はあなたの奴隷です。一生あなたのために奉仕します』 ってな！」

俺は自分の頭から血の気が引いていくのに気がついた。こいつ絶対頭おかしい、速く逃げ出した方がいい。いや、なんとしても逃げねば……。

俺は、一歩二歩と、店長の方に顔を向けたまま扉の方に向かって後退する。今、走れば何とかなる。

だが、俺の背中に突然柔らかいものがぶち当たった。

「何」

後ろを振り向くと、いつの間にか中年のババアが立っていた。柔らかいと感じたのは、彼女の今や重力に負けて垂れ下がった胸だった。

「あらあ、あなたが例の子？ 我が一族が積年の恨みを持つ例の？」「は？」

何を言ってるんだこのババアは？ こいつも頭おかしいに違いない。

「何のこと言ってるのか分からないって顔ね？ ムカックー。まあ

いいわ、私がその店長の妻で、マネージャーやってるものです。マネージャーって呼んでもらっていいわよ」 彼女はそう言って、右手を前へ突き出した。おそらく握手をしようって事だろう。

ここで言うとおりにしておかないと、何をされるか分からない。俺は彼女の手を、おそろおそろ握った。

そのとたん、握力全開で俺の右手を握りかえしてきた。

「ぎゃあああああ、あいたたたたた！！」

「ほほほ、痛い？ でも、これからこの程度ではすまさないわよ。廃人になるまで、いじめてやるんだから」

そう言ってババアは、やっと手を離れた。

「あ、あんたたち、こんな事やってすむと思うなよ。警察呼ぶからな！」

俺は、もう目に涙を浮かべながらそう叫んだ。

「ばっかねえ。警察に言いでもしてご覧なさい。即、殺してやるから」

「そうそう」

こいつらホントに気違いだ。何でこんな奴らが今までのうのうと生活してるんだ？ おかしいだろう、常識的に考えて。

「それにしても、飛んで火に入る夏の虫とはこの事ね」

「うふふふ」

店長が、気持ち悪い声で笑った。

こいつら、他の店員もこんな事して雇ったのか？ いや、あの明るく接客していた高校生の表情を見る限りでは、そんなことはないな。

俺だけに、こんな事をしているのだ。どうもこいつらは、俺に対して何らかの恨みがあるらしい。でも、俺には思い当たる節はないし、第一ずっと部屋に引きこもって生活していた俺に、人から恨みを買うことなんか出来るわけなからう。

「じゃああんた。うちの制服に着替えなさいな。そのロッカーの中に入っているから」

「この期に及んでまだ俺に働けと？」

「は？　口答えるの？　奴隷が、主人に」

そう言つと、マネージャーは棚に立てかけてあつた竹刀を手に持ち、いきよい良く床にたたきつけた。

「ひっ！　すすす、すみません」

だめだ。俺は口で何を言われようともう神経が麻痺してるから大して堪えないが、暴力をふるわれるのは大嫌いだ。痛いのは大嫌いだ。

俺は慌ててロッカーを開けると、ピンクと薄いブルーの制服を取り出し、シャツの上からはおつた。

「はい、だめー！」

マネージャーが竹刀で俺を殴つた。

「痛い、痛いよー」

「なんだその着こなしは、エリが中に入っちゃってるじゃないか！

お前は服も満足に着られないのか」

「そいつは二十五年間ずっとニートやってきたような野郎だ。服なんかまともに着られないんだろうさ！」

と、店長。

俺は慌てて、エリを整える。

「もたもたしやがって。やっと着替えたか！　じゃあ、次！　挨拶の練習な！」

マネージャーはロッカーの側面に張っているポスターを指さした。

「これが挨拶のマニュアルだ！　私に続いて、復唱するように！」

『い、いいい、いい、らっしゃ、らっしゃ、らっしゃいませ、ここ、ここにちわ』

そんな挨拶の言い回しはマニュアルのどこにも書いていない。こいつはどこまでも俺のことを馬鹿にするつもりのようなのだ。俺は、だからマニュアルに書いてあるとおりに読んだ。

「いらっしゃいませ、こんにちは」

マネージャーが舌打ちした。

「アタイの言ったとおりに復唱しろっていったはずだ！　なんだその、気の抜けた挨拶は！」

そう言っただけで彼女はまた俺のことをしないで殴った。

「痛い！　痛いですよー」

あのわけの分からないリズムをつけた挨拶を、俺にしろと言っのか！？

「もう一度言っただけから、全部リズムまでまねしろよ！」

「……」

「い、いいい、いいい、いらっしゃ、らっしゃ、らっしゃいませ、ここ、こんにちわ」

「……いいい、いらっしゃ、らっしゃい、ませ……こんにち、こんにちわ」

「だめ！　ちがう」

ババアが、また俺のことを竹刀で殴った。

「この！　痛いんだよ、ババア！」

思わずそう言っただけで、しまったと思ったときにはもう、竹刀の先が飛んできていた。「この、がきが、だれが、ばばあだって、次いしたら、シヨック死するまで、殴っただけから、な」

ババアは、俺のことをメチャクチャに殴った。もう、声も出ない。

コンペニソで（後書き）

さて、保君の今後はいかに？

檻の中

竹刀で殴られながら、変な挨拶の仕方を教えられて、体中痣だらけになった頃、ようやく挨拶の練習が終わった。

「やっと憶えたようね。いつとくけど、お客様の前で教えたとおりに挨拶しなかったら、マジで殺すわよ」

「は、はい……」

素直にはいと言っておかないと、また何をされるか分からない。

「じゃあ、次からレジやつてもらうから。いつとくけど、ミスしたら処刑よ」

「は、はい……」

僕とババアは、事務所から出るとレジに向かった。レジでは先ほどの高校生が仕事をしていた。

「じゃああんた、こっちのレジやってね！ 私は後ろで見てるから、やるのよ……」

「は、はい……」

「さつきから、ハイとしか口きかねーけどよ！ なんかあたしに言いたいことでもあんのかよ！」

「いいえ、そんな、滅相もない！」

僕は慌てて否定する。ここは従順に、従順になって、僕のシフトの時間が終わるのをまとう。まさかこいつらも今日一日中僕を拘束することはできないだろうし、もしそんなことをしたらうちの両親が探しに来るだろう。そうなったら警察をよんで、こいつら速攻で逮捕だ。そうしたら逆に、死刑にしてやる！

もっとも、それまでに殺されなければの話しか。しかし殺してしまつたらこれ以上イジメることはできなくなるのだから、大人しくしていれば、何とかなるだろう。

「お前今、大人しくしてれば自分のシフトが終わって解放されると

でも考えてたろ！」

このくそババア、鋭い！」

「残念だったな！ 私達はお前を死ぬまで拘束しておくからな！
そのぐらいの力が、私の夫、オーナーにはあんのよ！」

馬鹿な。コンビニの店長程度の人間が、戸籍に載っている人間を
拘束して、しかもそのことをもみ消すなんてことできるわけがない。
俺がこんな理不尽な目に遭っているのに、となりのレジの高校生
はただ淡々と客をさばいてゆくだけだ。ひょっとしてこいつもグル
か？

「何故、俺をこんな目に……」

思わず口からそんな言葉が出てしまった。

「ふん。そのことが分からないってことが、お前の一番の罪なんだ
よ」

そう言ったババアの顔は、どんな感情を表出しているのか読み取
れない複雑な表情をしていた。

不意に、三十代の工場労働者とおぼしき男が、カップ麺と500
ミリリットルのペットボトルと漫画雑誌を持ってレジの前に現れた。

「おら、ためー挨拶しろよ」

ババアが小声で言う。

「い、いいい、いい、いらっしゃ、らっしゃ、らっしやいませ、」

ここ、こんにちわ」 俺は教えられたとおりに挨拶した。

「はい？」

男は怪訝な顔をした。

「ぷっ、ばっかじゃねーの、そんな挨拶の仕方、あるかよ」

ババアがまた小声で言った。

「すいませんねー。この子ちょっと頭がたりないみたいで、挨拶も
まともにできないんですよ。さっき教えたのにねー」

ババアは、猫なで声でへこへこしながら話す。それにしても、頭
がたりないだと！

「おいおい。そんなやつ雇うなよ」

男は俺の方をちらつと見て、それから馬鹿にしたように口元をゆがめると、言った。

「ええ、でも働き口がないなんてかわいそうだと思ってね、ちよつたりなくとも、まあ何とかなるかと思って雇ったんですがね」

「ふうん。コンビニの店長なんてのは意外と優しいんだな」

そんな会話をしながらも、ババアはレジをうち、商品を手際よく袋に詰めてゆく。

「牧野君、ほら、ぼさつと見てないで少しは手伝ってね」

彼女はそう、いかにも優しいお母さんという風に言った。

「じゃあ、ありがとさん」

そう言っつてその男が店から出て行くと、途端にババアの態度は一変した。

「おい、今度変な挨拶して、もしも店にクレームがついたら、竹刀で百回殴ってやるからな」

「いや、でもそれはあなたがさっき、教えたとおりに挨拶しただけで」

「……口答え？」

そう言っつとババアは、俺の右頬をビンタした。ベチン、と凄いい音がする。

「口答えか？ 口答えするなら、もう私、お前にレジとか接客とか教えないからな。全部一人でやれよ！ 困っても教えないからな」

そう言っつと彼女は、つかつかと歩いて、事務所の中へとさっついった。

はつきり言っつて、彼女がいない方が助かる。レジは打てないが、となりのレジにいる高校生に助けてもらえば、何とかなるに違いない。彼は普通の人っぱいから。

「あの、すみません」

俺は、その少年に話しかけた。

「はい。何でしょうか？」

「俺、レジの打ち方分らないんだけど、マネージャーも教えてくれないみたいだし。君、悪いけどお客がいない間に教えてもらえる？」

そう言うのと、少年は右側の眉をつり上げた。

「は、お前誰に向かってそんな口聞いているの!？」

「え？」

だめだ、こいつも最初の直観どおり、店長たちとグルだ。

「お前さ！俺は職場の先輩なんだけどな！その先輩に向かってなんだよその態度は!？」

俺は、もうショックで何も口がきけなくなってしまった。自分より十歳近く年下の人間に、そんなことを言われるなんて……。

「とにかく、店長からお前のこといじめていいって言う許可が下りてるからな！徹底的にやってやる。日頃の鬱憤を晴らしてやる」

俺は、何か言おうと思って口を開きかけたが、もう何をしてもこの状況は打開できないと思い、押し黙った。

その時俺の方のレジに、中学生ぐらいの客がペットボトルとカップ焼きそばを持って現れた。

「こんにちは、いらっしやいませ」

俺はとりあえず、普通に挨拶してみる。

中学生は、無造作に商品を置いた。

俺はそこで固まってしまう。レジを打つには先ず、バーコードをスキャンしなければならないだろう。それには、バーコードリーダーを近づけて……。しかし、その後どうするんだ。商品が複数あるぞ。

中学生は、怪訝な顔をして俺の顔をうかがった。

「ちっ」

となりのレジのあのムカツク少年が、舌打ちしてこちらにやってきた。

「ごめんね。このおじさん、ちょっととろくてさ。何度レジうちを教えても、全然憶えないんだよね」

そう言いながら、彼は手際よくレジをうち、商品を袋に詰めてゆく。俺は屈辱に耐えながら、その様を見ているだけしかなかった。

「へー、大人なのに、レジも打てないんだ……」

中学生はそうぼそつとつぶやいた。当たり前だろ、俺はレジうちなんて一回も教わってないんだぞ。

「そうそう。ごめんね……」

ムカツク少年はそう言いながら、にやつと笑ってこちらを横目で見た。

俺は屈辱で震えていたが、何も言えなかった。

中学生は、商品を入れた袋を持つと、去っていった。

だが、その後すぐに、今度は四十代の主婦といった感じの女がレジにならんでいた。

「じゃあ、仕方ないな。俺がレジ打ってやるから、あんたは袋詰めやれよ。そのぐらいでくるだろ！」

そう言いながら、彼はレジ操作をしてゆく。

「ハイ、ボーツとしてないで、袋、袋！」

「は、はい」

俺は、レジ台の下に置いてあるレジ袋のうち、ちょうどいい大きさのものと思われるものをとる。

「お前さ、そんな大きさの袋ではいると思っているの？ この量の商品がさ！」

俺が今とつたのは中サイズぐらいだったから、大サイズじゃないと入らないと言うことだろうか？

俺は慌てて、大サイズをとる。

「ブブー、引っかかった、引っかかった！ お前が最初にとつたやつでいいんですよだ」

何を言ってるんだこいつは、まあいい、耐えろ、耐えるしかない。袋詰め。先ず、重くて固い牛乳パックや醤油のペットボトルから詰め、その後カップ麺、最後に形の崩れやすいスナック菓子を詰め

よう。

「お前、なんて詰め方してんだよ！」

「は？」

「先ず、袋の底を広げて、商品を手に持ったときに安定するように詰めなきゃ駄目だろ！ そんなことも教えなきゃわからねえのかよ」
腹が立つが、この場合こいつの言っていることは正しそうだつたので、商品を全部袋から出して、一つ一つ詰め直してゆく。

「もたもたしないで、さっさとしなさいよ！ あたしは次の花田駅発の列車に乗らなきゃなんないのよ！」

「ひっ、すいません」

こいつめ、この客が急いでいることを知っていて、わざと袋詰めをやり直させたな！

「まったくもう！ あんたこの仕事に向いてないんじゃないの！」

そう言つて、そのおばさんは袋をひたくつて大急ぎで店から出て行つた。

もう限界だ。あのマネージャーは、俺を絶対逃がさないというようなことを言っていたが、そんな馬鹿なこととはできないだろう。このまま走つて、逃げ出せば……。

その時、発信源がどこだか分からない音が聞こえた。

「……もうす……たすけ……から」

かなり年若い、女の人の声だ。俺は辺りを探すが、この店のどこにもそんな女性はいない。

いじめられすぎて、ついに幻聴でも聞こえてきたのだろうか？

だとすれば、俺を精神崩壊させるといふ店長たちのもくろみは成功したことになる。だが……、

「あなたは、自力ではその場所から抜け出せない。でも大丈夫、私が、助け……」

今度ははっきりとその声が聞こえた。ずっと昔に、どこかで聞いた

たような声……。

しかし、誰の声だろう？

「おい、お客さんきてるぞ！ さっさと接客しろ！」
俺はその声で、現実に戻された。

「こ、こんにちは、いらっしやいます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177i/>

保伝説

2010年10月8日11時42分発行